

各業務：院内感染対策室

—概要—

感染対策に関する院内の組織は、院内感染対策委員会 (ICC)、院内感染対策チーム (ICT)、院内感染対策ワーキンググループ (WG) から成り立っている。2018年からは、薬剤に関する業務に関して ICT から独立した抗菌薬適正使用支援チーム (AST) を発足した。院内感染対策室では、ICT と AST が協同し感染症から、患者やご家族・来院者、スタッフなど病院内のすべての人を守るために組織横断的に活動を行い、病院内の感染対策に努めている。感染症は、施設を超え地域全体に広がる可能性がある。近隣の医療機関とも連携しながら、地域ぐるみの感染対策を推進していく必要がある。当院は、泉州南部地域では数少ない感染管理加算1取得施設であるため、感染管理加算の連携施設だけでなく、長期入院療養施設や介護に携わる職員などに向けても指導を行い泉州南部地域の感染対策の向上に努めている。

—実績—

2020年度 院内感染対策室の活動と担当者

グループ	細目	担当者
サーベイランス	BSI、SSI、VAE、症候(発熱患者)、針刺し、粘膜汚染	リンクスタッフ 松本 山内 藤原
環境ラウンド	感染の視点から各病棟の環境を調査	リンクスタッフ ICT メンバー
医療材料	新規医療材料の検討	ICTメンバー
教育	職員に対する教育活動 ・院内感染対策研修会 ・e-ラーニング研修 ・リンクスタッフ活動報告会 ・手洗い検査 ・手指消毒剤使用量調査 ・手指衛生直接観察 ・オーデットの実施 (末梢カテーテル、CVカテーテル、尿道カテーテル、個人防護具について)	リンクスタッフ ICTメンバー
清掃関係	清掃ミーティング、清掃ラウンド	山内
広報	The 院内感染対策 News 発行	山内 泉原
耐性菌、抗菌薬 (AST ラウンド)	抗生剤適正使用チェック 医師への指導 サーベイランス 感染症レポート作成	ASTメンバー

◆サーベイランス

【針刺し・粘膜汚染 件数】

	針刺し	粘膜汚染	合計
2020年度	41	14	55

【BSIサーベイランス】

期間	延べ入院患者数	延べ挿入日数	使用比	感染率
2020年4月 ～2021年3月	8,954	432	0.05	2.31

◆広報

The院内感染対策News (No.1～No.5、臨時号) 発行

◆教育

・新型コロナウイルス感染症COVID-19 ～この冬に向けての今後の感染対策～ ・COVID-19疑い症例と抗菌薬	出席率:92%
2020年9月15日～2021年3月9日 COVID-19対策のため、E-ラーニングにて開催 ・医療関連感染サーベイランス ・抗MRSA薬について ～MRSA感染症治療ガイドライン改訂版2019より～	出席率:44% (3/31時点)
2021年3月9日～2021年度 第1回研修会前日まで COVID-19対策のため、E-ラーニングにて開催	

◆感染管理加算

【相互査察】

監査施設・査察病院	実施日
査察施設:府中病院	2/15
監査病院:大阪母子医療センター	11/30

【合同カンファレンス】

テーマ	開催日	担当病院
COVID-19(疑い)事例について	7月30日	当院
この冬に向けての発熱患者の外來診療について	9月24日	当院
各施設でのインフルエンザ患者、インフルエンザ様症状患者の受診状況と対応について	11月19日	当院
抗MRSA適正使用について	3月4日	当院 リモートで開催

◆結核関係

- 1)結核患者治療成績評価検討会(第4四半期)
管内の塗抹陽性結核患者の治療成績の検討及び助言
3月8日(月)
14時30分～17時
場所:大阪府泉佐野保健所 3階
山内 真澄

◆その他

- 2020年度 大阪府院内感染対策支援チームへの参画(9回)
俵 正也、山内 真澄

—今年度の成果と反省点—

COVID-19患者を受け入れる事となり、個人防護具の着脱手順の作成、COVID-19患者対応のマニュアル作成など受け入れ体制の構築を行った。患者受け入れ後は感染対策の指導などを積極的に行った。職員や患者が発生した際には濃厚接触者の洗い出しなどの初動対応を行い、院内でのクラスター発生はなかった。近隣地域の泉南市、熊取町、田尻町など近隣の自治体より依頼があり、高齢者・介護施設、保育施設に向けて「新型コロナウイルス感染症対策について」の研修を行った。泉佐野保健所主催の泉佐野保健所管轄内の医療施設対象の感染症対策連絡会や大阪府介護福祉部主催の泉佐野保健所管轄内の高齢者施設対象の研修会を実施した。大阪府からの依頼を受けて、大阪府院内感染対策支援チーム員としてクラスターが発生し

た病院や施設を訪問し、治療や感染対策についての指導を行った。加算連携施設に対しての合同カンファレンスでは、自施設でのCOVID-19対応に結び付けられるようなテーマを選択し、カンファレンスを行った。院内では、COVID-19対策として、患者に接する際にはサージカルマスクとゴーグルが着用となったため、環境ラウンド時にゴーグルとサージカルマスクを着用できているかどうかの確認を行った。手指衛生の回数について、1患者あたりの目標回数を20と定めていたが、COVID-19流行を受けて中央部門は目標回数を遥かに上回る回数で達成した。一般病棟は昨年度では1患者当たり10回にも満たない部署が多かったが、今年度は多くの部署で10回近い回数となっていた。リンクスタッフに手指衛生直接観察を行ってもらったが、患者接触前63%（昨年度43%）、患者接触後66%（昨年度54%）と前年度と比べて遵守率は向上していた。リンクスタッフの働きもあり手指消毒剤の使用量、遵守率ともに向上が認められた。リンクスタッフの活動の一環である活動内容の実践報告会を、今年度は看護局だけではなく、放射線科、臨床工学科、リハビリテーション科にも行ってもらった。薬剤科では、前年度にクリーンタイムの実施が定着し、今年度も引き続き啓発活動を継続したことで廃れることなく実施できている。COVID-19患者の受け入れにより、持参薬の扱いや返品薬の回収方法など業務での混乱もあったため、COVID-19パンデミック時の薬剤科内運営マニュアルを早急に作成する必要があった。細菌検査室では、前年度より流行しているCOVID-19に対し、様々な検査方法の拡充を行った。年度当初は専任の技師のみ行うことの出来たPCR法しか検査方法がなかったが、その後LAMP法の導入、従来使用していたPCR機器でのCOVID-19検査の対応、抗原検査のための機器導入など、他の技師も行うことが出来るように目的に応じた検査方法を選択できるよう対応した。LAMP法導入時には、24時間体制で検査が出来るよう、安全キャビネットの使用方法など検査技師全員に研修を行った。これにより、職員での疑い例発生時などは、職員・患者により異なる方法で並行して検査を行い、院内でのクラスター発生の抑止に貢献できたと考えられる。リハビリテーション科には、今年度より院内感染ワーキンググループ(WG)への参加を行ってもらった。WGへの参加により、科内における感染対策の意識向上に繋げることが出来た。今年度も昨年度と同様に各セラピストの手指消毒剤の使用量の管理を行った。1ヶ月当たりの使用量を算出し使用量の少ないセラピストに対して直接的な指導を行い、感染への意識付けを図った。今年度

の反省として昨年に引き続き1患者当たりの手指消毒剤の使用量が少ない事が挙げられる(1患者当たり2.5回程度)。放射線技術科では、感染に対する基本的な知識の習得に重点を置いた。その方策として、院内の感染対策研修会への全員参加を最低限の目標とした。結果、業務的に厳しい面もあり当日参加ではなくDVD研修を含めて全員参加は達成された。個々の認識にとって有意義になったと考える。

—来年度への抱負—

感染対策の意識が低下しないように部署の感染対策の中心となるリンクスタッフの知識向上に向けて、スタッフのレベルに合わせた教育システムを構築していきたい。薬剤科では、ICTメンバーによる薬剤科スタッフへの積極的な啓発活動を引き続き実施し、環境整備の質を上げることを目標とする。AST活動として、AMRアクションプランに基づき経口第3セフェム系抗菌薬の使用状況の把握をし、外来患者の急性気道感染症、急性下痢症の抗菌薬使用状況の把握に加え経口ニューキノロン薬の使用状況の把握を新たに行うこととする。COVID-19感染症のようなパンデミック時に備え、薬剤科内運営マニュアルの整備を行っていく。細菌検査室では、今後COVID-19以外にも様々な感染症の流行が予想されるため、検体取扱時の感染対策の徹底と呼吸器系検体検査時(インフルエンザ等)には必ず安全キャビネットを使用する事などについて、定期的に啓発・教育していきたいと考える。リハビリテーション科では、来年度は院内のWGにセラピスト1名を介入させ、感染の事例に対し他部門との情報の共有を行っていききたいと考える。また手指消毒剤の使用量を増加させていくことで感染の防止に努めていきたいと考える。放射線技術科では、手指衛生の徹底を行い成果が見える形に出来た。今後は更に適切な手指衛生のタイミングの理解を深める活動を行っていく。

